

1 作 物

項 目	作 業 内 容
	(今月の作業のポイント) ○早期水稻の中干し ○普通期水稻の田植え ○大豆のは種準備 6月 は普通期水稻の田植え時期であり、大豆のは種に向けた準備の時期でもある。5月15日高松地方気象台発表の四国地方の1か月予報によると、向こう1か月の気温は平年より高く、降水量は平年より多い見込みである。ほ場への入水や除草剤処理の際には気象情報に注意し、作業は計画的に行う。 なお、ほ場や周辺設備等の点検は、川の増水等により人命に危険があるため、必ず風雨が激しくなる前に済ませておき、決して増水中の川や水路に近づかない。
(1) 早期水稻の中干し	目標穂数の8割の茎数が確保できたら中干しを行う。中干しの期間や程度は気象・土壌条件により異なるが、7～10日程度を目安とし、過度な中干しは控える。中干しの終了は遅くても出穂の1か月前とし、中干し後は2～3回走り水を行う。その後かん水し、3～4日おきに間断かん水を行う。
(2) 普通期水稻の田植え	ア 田植え準備 品質の良い米づくりのため、耕起までにケイ酸質資材や含鉄資材を投入し、土づくりに努める。ケイ酸には、茎葉を丈夫にし、耐倒伏性や耐病性を高めることで、収量や品質を高める効果があり、鉄には根腐れを防ぐ効果がある。 また、深耕すると根域が拡大し、根張りが良くなり、耐倒伏性が高まることで収量や品質が向上するため、耕起深15cmを確保する。 施肥は代かき前3日以内とする。肥料成分や濁水の河川流入を防ぐため代かきは浅水で行い、田植え時は強制落水を控えて自然減水後に田植えする。 なお、麦後では耕うんの作業速度を遅くし、できるだけ深く耕起して麦稈が多く土と混ざるようにする。代かきは浅水でロータリ回転数や走行速度を落として行う。 イ 田植え ‘ひめの凜’の移植適期は平坦地では6月22日まで、標高100m以上の水田では6月15日までである。‘にこまる’の移植適期は6月上旬～中旬であり、登熟遅延の可能性があるので遅植えを避ける。高温障害が発生しやすい‘ヒノヒカリ’では、

項 目	作 業 内 容
(3)大豆のは種 準備	6月中旬～下旬に移植し、高温障害の回避に努める。 栽植密度は坪50株を基本とする。穂数が十分確保できない品種や地域・ほ場によっては不適な場合もあるので過度な疎植は避ける。 ウ いもち病・雑草対策 田植え後の置き苗はいもち病の伝染源となるため、補植が終わった後は、速やかに処分する。また、常発地や耐病性の低い品種では、本病に適用登録のある箱施用剤を必ず使用する。 除草剤の効果を安定させ、水田外への成分の流出を防ぐため、除草剤散布後3～5日間は湛水状態を保ち、7日間は完全に止水する。除草剤散布後にオーバーフローさせると、除草効果の低下や環境汚染につながるので、散布後に多量の降雨が予想される場合は除草剤の散布を延期する。 ア 排水対策 排水対策は、転作水田において重要な技術対策である。そのため、梅雨入りまでに本暗きょや弾丸暗きょを施工し、ほ場周囲に周囲溝（額縁明きょ）を設け、適期には種できるほ場づくりに努める。 イ 土壌改良資材・基肥の施用 大豆の好適土壌pHは6.5～7.8で、カルシウム要求量の多い作物である。このため、苦土石灰100～150 kg/10 aを、耕起前までに施用する。また、大豆は連作すると地力が低下して減収するため、連作ほ場では堆肥を施用し、地力の向上を図る。 基肥は、転作1年目の水田では10 aあたり窒素3 kgまで、リン酸とカリをそれぞれ6 kg程度施用する。また、連作ほ場では地力が低下するため窒素成分は3～5 kg、リン酸とカリをそれぞれ6～10 kg 施用する。なお、麦稈をすき込む場合は、一時的に窒素飢餓を起こすので基肥の窒素量を1～2割増やす。 ウ 種子更新、種子消毒 種子は品種固有の特性を備え、粒形が斉一で充実が良く、病害虫の被害がない良好なものを選定する。また、自家採種を続けると品種の劣化や種子伝染性病害が発生するため、3年に1回は指定採種ほ場の優良種子に更新する。なお、紫斑病の予防のため、キヒゲン、キヒゲンR－2フロアブル、クルーザーMAXXなどにより種子消毒を行っておく。



写真 弾丸暗きょ施工